

空・草・芽

村石京子

五月らしいものって何だろうかと編集会議で話題になったときに、この三つをあげました。五月晴れのぬけるように青い空を眺めていると、人間は本当は小っちゃくて大したこと出来ないでいるのに、そんな現実を忘れて、可能性がいくらでもひろがっていくような、希望もぐんぐんふくらんでくような伸びやかな心になってきます。日本は国土は狭いけれど、自然の恩恵はまだ残されており、四季おりおり変化に富んだ移り変りの見事さは私どもの心を豊かにしてくれるのに大きな役割をもっています。よく旅に出ると気分転換があるというのも、新しい土地へ行くからということだけでなく、人間が心に自然の影響を大きく受けることも意味しているのでしょうか。

その中でも五月は日本の風土からいって一年中で最も美し

い季節、生命あるものがみな成長していく、まるで自然の鼓動が聞こえてくるような時期です。輝く春の姿は、瀾漫と咲き競う花々やそこに群れて舞う蝶などに満喫することが多いのですが、一方今にもぼっこりと音を立てて開きそうに柔かくふくらんだ木々の芽や、陽さしをあびてまるで背のびしているみたいに伸びて青々とした草などには、これから育ってゆく幼児の姿と似かよったものを感じさせます。

そのこれから伸びていく春の息吹きみたいな子どもたちの集まる五月の保育室の中は、どんな様子でしょうか。前月は子どもにとっても保育者にとっても、新鮮さと不安と期待が交互に織りなした日々でした。多くのとまどいと緊張の連続の中に時が過ぎたようです。そんな思いのある日、ふと何か和らぎのある日があります。

例えば、昨日までポツンとたたずんでいた子どもがぎっか

けを見つけて友だちと遊びだして笑顔を見せてくれた日、乱雑に散らかった遊具を手伝って丁寧に片づけてくれて優しい気づかいをしてくれた子ども、そして今日は朝からずつと時間間の経つのも忘れ夢中になって砂場の山づくりのうちこんでいる姿の子どもたち等々、見つければたくさん出てくるでしょう。毎日毎日の保育の中に何かしら新しい動きが出てくる時ですし、その中に保育者の心を満たしてくれるものがあったりします。そして個々の子どもの新しい動きや変化とともに、あの手でばらばらだった思いの四月と比べて、級の中にどこか淡い連帯感のようなものが芽生えてきたり、つかの間の落ち着きなどを感じさせる日もあったりします。

教師自身の中にも一日をふりかえってみる気持や、子どもを離れた時間にも級の子どもの思い起こしてみるだけのつながりが少しずつ生まれてきます。けれど順調なくりかえしの日が迎えられるにはまだまだ日も浅く、こんなことでどうしようとする日々の保育に行きづまりとあせりを覚える日も多いのです。子どもとともに過ごす大事な一日一日はやり直しができないけれど、でも決して方向づけをあせったり、小さなスケールにまとまってしまうまいようにと、保育の中に工夫

と変化の必要な頃といえましょう。

日々の保育に研究と反省とをもち、明日のために保育室での充分な準備と検討をし、そして一人一人の子どもたちのかかわり合いにきめ細かい配慮をすること等々みな大切です。でも澄みわたった空の青く広い日には、細かいことは一度全て忘れて戸外に飛び出してみるのもよいかもしれません。小さな摩擦や行きづまりは、大きな空の下では思いきりよく捨てられるかもしれませんね。

緑の草原にねころんで、どこまでも広い空を見ながら話をしあったり、歌を口ずさんだり、汗びっしょりになって追いかけてこをしたたり、ころころころがってあそんだり、みんな嬉しい五月の味わいです。

戸外にはおいに出て、五月の自然の恵みを身体一ばいに吸収し、大人も子どもも明るくさわやかになって新しい明日を迎えるために、小さなことによくよいしな心をもとうではありませんか。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

